



月刊 第 520 号

木の葉が散る

人は逝く

ジョンジョンゴウ(順々業)

一、好季節なのに

悲しいモンパイ

十月の末から、十一月にかけて寺泊町役場附近、荒町、上田町

にモンパイ(死亡公告)が林立した。木の葉は、大町の公園を始め、ハキタてらんねほど道をうめた。ハクあとから落ちる。それは、



前月号で紹介された史蹟まつりの中の史蹟ガイドのナップです。教育委員会の女子職員が参会者に大町象感園2段目の委経・弁慶の井戸のいわれを説明しての名ガイドスタイルです。町にくる観光客に、公民館が史蹟ガイドを養成する始めてのココロミで、大変内外から期待されます。10月10日出席した50数名の町の方々が、公園3段にわかれての聴講生で、盛会でした。

植物のシンチンタインヤ。落ち葉は、春をまつ大切な木の榮養。しかし、人間が死ぬのは、かなわん。まだ死ぬつもりがないというのに。でも、人間にも四季があった。娘がヨメと花さかせ

カカとしぼんで
パパと散りぬる
チャッチャッチャッチャツ

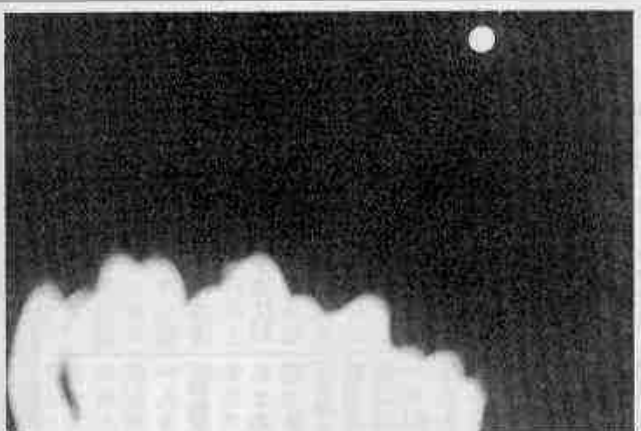
昔からの文句。先だって新聞の投書ランに、「カガのコトバは、下品でない。日本人の夫婦愛のシブトサをあらわす」とかいていた。

それにしても、死ぬのはおそい方がよいのは、昔も今も同じ。いつも三月花のころ。女房十八、わしやハタチ。死なぬ子三人みな孝行。つこうてへらぬ金百両。

死んでも、いのちがあるようにどっこいそうはいかん。人の死ぬのばかり、アテにしている、いつのまにか自分の出番がくる。おらあどうしようば。そこで、町役場附近で、亡くなられたお方々のモンパイを拝むと次の通り。

- 河合ヒサさん(河忠) 九十六才
- 斎藤喜代さん(寅市) 六十八才
- 佐野ヨイさん 九十一才
- 武田静行さん 七十六才
- 柚木浅三さん 七十六才
- 安達健次さん 八十才
- 小川誠二さん 四十九才

残念なことだが、人は生れたからには、いつかは



仲秋の満月がかがやく寺泊の空は、すばらしい夜でした。クジャクサポテン科の有名な銘花「月下美人」を手に入れて、夜に入ってから咲かせました。かすかな音をたて、かぐわしいかおりをまきちらしながら、3分ほどで満開になりました。名前通り、クジャクが羽根をひろげたスタイルでお月さまを仰ぐように闇の中に華麗な白色がかがやきました。しかし、4時間のいのちで花の命が終りました。作家の林フミ子の言葉通り、花の命はみじかくて苦しきことのみ多かりき。

二、チヨイチヨイ寺泊帰り

永生きのモト

この日を迎える。長くても、みぢかくても、それぞれもらった命。寺泊では、むかしから、死ぬ生きるは、ジョンジョンゴウ。生・老・病・死にガツチリ対応しましよと先祖の声。

寺泊町にお帰りなさい。永生きなさい。先だつての新聞(日報)に、糸魚川市出身の立教大学教授で精神科医の町沢静夫先生が「故郷は心を癒す」と題してコマゴマ書いておられた。分裂症の青年(大学を出てから大手電気メーカーに就職中)が医者の手ではななおらなかつたのに、しばらく故郷に帰したら、なおつたという事例をあげておられた。「東京の会社のことごとくの中で、幻覚妄想状態に陥つたと思われ。しかし、故郷に帰ると、彼の心の疲れは次第にときほぐされ、



自然の山や田畑が彼の心を癒し、母なる大地が彼の心を静かに包みこんでくれたに違いない。このような雰囲気の中で、彼は治ったのであろう。母なる故郷の大地が彼を治し癒したものであろう。」
そして町沢先生はいう。
「いつになっても故郷は、地方から出てきた私たちにとって母なる大地であり、母なる海であり、そしてまた癒(いや)しの場所である。」
こういわれてみると、故郷でらどまりは、在外のお皆様の「いのち再生の場所」として活用していただきたいもの。

30年近く、ふるさとだよりの発送作業を奉仕して下さった小川誠二さんが10月31日急病のため、長岡日赤病院で死去され、お葬式(11月3日)には関係者相談の上、ふるさとだよりから「生花」を贈りました。ほかの者では、キカイの操作ができなくて発送にこまりました。長男 真(マコト)さんとオイの小川隆司(タカシ)さんに今後協力を期待しています。それにしては、49才では残念でなりません。

三、芸能万能寺泊人

十一月十四日に、寺泊町文化センター(ハマナス)で、寺泊芸能人オールスターキヤストで、三十一のプログラムで、みごとな演出があった。
三ページの写真は、その時のスナップであるが、寺泊大漁太鼓や花火太鼓、そして八木節の踊りや、野積の酒づくり唄など、次々と迫真の演技をみせて下さった。
先だって東京の芸術座で、森光子の演ずる千五百回目の「放浪記」を三時間半にわたって見たが、その時の七十八才の森光子の演出に「すごみ」を感じたばかり

だが、寺泊町の芸能人の動きも、練習に練習をかさねた語りかけの打ちこみにシロウトの私には頭のさがる迫力を感じた。ビデオをうつして東京寺泊会などで紹介したいと思った。
主催は、寺泊町芸術文化協会の後援は、寺泊町公民館。
毎年秋の今ごろ、この町民芸能祭が無料公開されるので故郷を訪ねるすばらしいチャンスに予定されたいかが。
日曜日の午後三時開演で、一泊二日の帰郷のたのしみを持たれたらいいかが。
年をとると、同級生がすくなくなるので、若い人たちのような大がかりの同級会ができなくなる。
四、五人のささやかなあつまりでも、同級会はたのしいもの。
寺泊の金山に、町の夕映荘がある。町の人は、利用するお方が多いが、在外の人は、知らない人ばかり。年中利用できるが、月曜・土曜は御ヤスミ。
町の人なら六十五才以上無料、入浴日は毎日。料理・飲物は電話で持ってきて、個室もあり、海を見おろし、佐渡を眺めながら昔話から今ばなしから、話題はつきない。
同級生が十人以上なら、町がバスをサービス。
四月から十月までは、午前九時から午後四時三十分。十一月から三月までは、午前九時から午後四時までの利用時間です。そんなささやかな同級会をなさ

小説 一人暮らしの日々 (その2)

矢野

る時に、余興のひとつとして、千年の寺泊を演出した新潟県民会館で三百人が、寺泊のレキシを紹介した舞踊リサイタル「寺泊物語」のテープをおかせできます(ふるさとだより)。
年をとっても死ぬまで生きていくんですから、百パーセント有効にその日その日をたのしもうじゃありませんか。



寺泊にある池の鯉を次から次へとたべてしまおうアオサギの姿です。大きな池では、70匹がこの鳥のギセイになりました。昔は全く平和の池でしたが、野山に鳥のエサが少なくなって山を越えて池の鯉をわらう時代がきました。ツリ糸を張りめぐらせてアオサギをふせいでいるが、人間の方がまけそうなのごろです。

「政権交代したんだから仕方ないこと、そんなひがみもあるからまあ楽々とあまり考えないで暮せよ。」
「いや年寄のひがみなんかでは絶対ない。
俺は疎外されているんだ。一体何の為に若い頃から働いて来たんだと言いたい位だ。金を貯めては、一枚ずつ田んぼを買ってさ。俺一代で田んぼを倍近くにしたらんだ。田んぼ仕事の間は豚も飼った。土方仕事にも出た。俺程仕事した人は居ないはずだ。」



セガレ夫婦は、田んぼを厄介も
ん扱いしやがって……」
「いや、それにしても、よく出
来たセガレだこて。」
田植えはするし、稲刈りはする
し、あんたが水の管理をして、
二町歩の田を家中で守っている
んだ。セガレだって返事をした
くない時だってあるさ。」
色々会社の仕事で、頭が一杯の
時だつてあるし、
セガレさんだつて段々年をとる
に従つて、責任も重くなつてい
るんだらうし、
「うん、今では工場長の次位だ
から、まあちつとは年の割に出
世したのかも知れん」
「そらだらう。俺から見れば、
うらやましい限りだよ」
セガレのことほめたら、

中村も少しは気持がほぐれたら
しい。
二人は共に戦中、戦後と生きて
来た。大正生れの人間は、
とかく子供とは、そりが合わない。
去年なくなった妻は、六年間病
床にあつた。
病妻を看病しながら、ちよつと
したことで、セガレ夫婦と大喧
嘩して、
そのあげく、「出て行け」と大
喝したものだ。
一ヶ月後にセガレ夫婦、孫三人
は隣町のアパートに越して行っ
た。
「もう親でもない。子でもない。
勝手にしやがれ」
短気の風間は、普段はじつと堪
えているが、
一たん歯止めがきかなくなると、

前後の見さかしく怒り出す。
物を投げつける。
何をやらかすかわからない。
亡妻は、風間の気性を知ってい
るから、そればかり心配していた。
六年間パーキンソン病の難病を
煩つて、最後は水が飲めなくな
つた。
最初は手足の麻痺から始まつて
歩行困難になり、
やがて寝たきりになった。
それから一年後には、菓をのむ
水さえ飲めなくなり、鼻から胃
袋まで、ビニールのパイプを通
して、薬やら、流動食を流しこ
んだ。
四度目の入院であつた。
水が飲めなくなつて、
一ヶ月後に妻はあの世へ旅立っ
た。

聚感園史蹟ガイド

大町 鈴木 正作

恒例の第十五回史蹟まつりが、
大町聚感園で行なわれた。
十月十日、晴天のなかで、寺泊
町・議会・寺泊町観光協会・初
君をしのぶ会など、まつり関係
者と見学の皆さん、五十余名が
集まつて、久しぶりに盛大なま
つりとなった。
神事の後、町の主婦による自作、
自演の紙芝居、「民話」初君の上
演、和歌の三十一文字にちなん
で、三十一枚の絵にまとめた勞
作で、
やさしい口調で語りかける見事
な出来栄であつた。
子供たちに、わかりやすい歴史

物語としてみがきをかけてお願
いしたい。感動の場面でした。
このすぐあと、公民館で特訓、
史蹟学習とプロのガイド先生の
指導を受けてきた公民館長を先
頭に、会社社長さん、元・現学
校の先生、退職会社員のお父さ
ん、町教育委の女性職員ガイド
下さんが、
観光客に扮した皆さんを相手に、
義経、弁慶、順徳帝、五十嵐伊
織、越之浦神社と園内を散策し
ながらの初舞台になつたわけ
です。
顔も名前もわかる人の前では、
やりにくかつたともらしていた
ようですが、
初めてのガイドで、これだけや
れば大したものだと、会場の
雲田気は盛り上つていた。

